

---

# メール

竹仲法順

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メール

### 【Nコード】

N7599X

### 【作者名】

竹仲法順

### 【あらすじ】

都内の上場企業で働くOLのあたしは同じサラリーマンで営業職の陸と付き合っていた。携帯は常に持ち歩き、互いにメールし合っている。休日同棲の関係で、会いたいときは連絡しながら会い続けていた。日常が淡々と流れていくのを感じ取りながら、お互い過ごしていたのだが……。

\*

バッグの中で携帯が鳴っている。これはメールが届いたときの着信音だ。あたしはテーブルの上に置いてあったお菓子の皿からいったん手を離し、コーヒーを一口飲んでフリップを開く。古い型式の携帯で今から四年前に買っていたのだが、まだ使えると思い使っていた。画面を見ながらメールを読む。彼氏の陸りくからだった。>今、昼飯食い終わって時間が空いてたからメールしてみた。また今度の土日会おうな。スケジュール空けておくから。じゃあねくと打つてある。返信ボタンを押してフォームを作り、>あたしもご飯食べてお茶してたところだった。お仕事疲れてるでしょう？お昼からも頑張つてねくと打って返す。そしてフリップを閉じた後、携帯をバッグに仕舞い込み、立ち上がって歩き出した。さすがに連日仕事は続くのだが、平気だ。あたし自身、社ではずっとキーを叩きながら、資料や書類を作ったり、雑用などをこなしたりする。もちろんこの大都会でも会社員の女性がもらう給料などわずかなものだ。だけどそれでも十分足りている。むしろもらった給料の一部を貯金しているぐらいだった。それで事足りるのである。何かあった場合に備えて、だが……。

陸がいてくれるのだが、結婚などはまだ考えたことがない。別にそこまで改まってすることはないと思っていたからである。結婚して何かが得られるとも思えば大間違いだ。と言うよりも結婚したことで、愛情が冷めるカップルの方が圧倒して多い。そう思うと、陸との愛情を育てていくには、結婚は選択肢として入らなかった。休日同棲の方が楽なのである。気を使わずに済むし。それにお互いが満たされる関係でいられるのだから……。

\*

手が腱鞘炎けんしやうえんで強張こわばってしまうぐらい、パソコンのキーを叩いてい

た。さすがに疲れる。ふつとトイレに立つこともあった。そういつたときは必ず携帯を持っていく。上司の目を盗み、トイレでメールすることがあった。別にこういったことは珍しくない。女子社員でもたくさんいるのだ。ずっと仕事していたら疲れる。社自体、一応東証一部上場企業でオフィスは五反田にあったが、大きな会社だから社員は多い。本社は自社ビルで、年商が優に七十億円以上あった。そういった会社だから、いい加減なことをする人間は最初から雇わない。それぐらい入社時は厳しい試験をクリアし、入ってくるのだ。単なる面接だけで誰でも入社できる町工場や、吹けば飛ぶぐらいの零細企業とはまるでわけが違う。比較すること自体間違っているのだ。あたしもこの会社が相当な社益を上げていることを知っていた。常に帳簿などを見たりするからだ。エクセルで作成された財務関係の資料は一通りサラッと見ていて、どういったところに金が流れていくのが自然と頭に入っている。OLというのはそういった事務的なことをするのが仕事だ。何も特別に難しいことなどをするわけじゃない。単なる雑用などをしながら、同時にパソコン上でそういった金銭の流れがあるのを知っているだけだった。

\*

陸はよくあたしの部屋に来る。しょっちゅうというわけじゃないけれど、土日は必ず来ていた。同棲関係が続いてもう七年になる。二〇〇四年の十月に都内の会社間の立食パーティーで知り合ってから、付き合い出した。あたしの新宿の1Kのマンションに来るのだ。普段彼は中野の1DKのマンションにいる。互いに貧乏していた。引越すにしても都内で中心部になれば家賃は高い。そういつたところよりも、むしろ普通に住居としての機能が備わっていれば問題ないのだ。特別贅沢をするわけじゃないし、あたし自身、しっかりとした生活感があった。それで過ごせるのだ。たとえ給料が手取りで二十万ちよつとしかなかったにしても……。陸が来てくれたときは料理を作る。豪華な食材こそ買えなかったのだが、自炊していた会社に行くときは昼間ランチ店でランチを食べるのだが、大抵それ

モリーズナブルな店のメニューばかりで財布の紐は決して緩<sup>ゆる</sup>まない。

\*

高校卒業後、広島の田舎町から東京に出てきてずっと働き続けていた。最初はお水の仕事などをしていたが、さすがに水商売が出来るのは二十代前半ぐらいまでである。アラサーになると、もうそういったことは出来っこない。色気が出てくるのは確かに加齢すればこそなのかもしれないけれど、若い女に勝負しても勝てないのだ。第一スタイルが崩れるのだし、メイクの乗りも悪くなって、おまけにアルコールにも抵抗が出てくる。そう思えば、今のOLの仕事の方が遥かにマシだ。体で勝負するわけじゃなかったのだから……。

陸もあたしと同じアラサーで年は少し上だったが、別に悪い人間じゃないし、普通にいい青年だ。惚れ込んでいた。彼の優しさに。そして包容力に。営業マンは笑顔を作る。その練習を常に行っているらしい。そんなことを聞いていた。やはりサラリーマンもOLも一日中追い立てられるようにして仕事をするのだが、それが現実だ。定時で仕事が終わわり、残業などもこなしながら、自宅に帰り着くのは大抵午後八時半を過ぎる。疲れたときでもメールは欠かさず打っていた。陸はあたしにとって一番大事な存在だ。そういつたことが分かっていたので普通にメールを打つ。特に上司の悪口などは文面などでも言っていた。あたし自身、携帯のキーを叩き、メールしていた。夜眠る前に打ち終わり、送信したらすぐにベッドに横になる。そして朝方、窓から差し込む光で目が覚めると起き出し、彼から着ていた返信を読む。メールは欠かせなかった。半分依存症だ。それに電車の来る駅などでも携帯をネットに繋ぎ、情報を見ていた。何も遠慮することはないと思う。腹の出た年配のサラリーマンなども最近では週刊誌やアダルト誌などを買わずに、ネット上のエロサイトなどを見ているのが現実だったのだから……。

\*

「陸」

「何？」

「休日ぐらい普段のこと忘れましょ」

「ああ。いつもは客の顔色ばかり窺<sup>うかが</sup>ってるからな。正直しんどいよ」  
「でしょ？あたしだっていつもの職場じゃ疲れてるから、こうやって休みの日ぐらいゆつくりしたいの」

二人きりでベッドの上に寝転がり、抱き合っていた。何も特別なことをするわけじゃない。単にキスをして、体を重ね合うだけで満足なのだから……。こういった日はゆつくりと平日の疲れを落とすつもりでいた。別に成人男女同士で付き合っているのだし……。変わったことは特にない。一週間はあつという間に過ぎ去っていく。そしてまた新たな週が始まる。その繰り返しだった。最近仕事に没頭していれば、一ヶ月などすぐに過ぎ去る。月日が流れるのが徐々に速くなっていた。そしてあたしも半年に一度ぐらいは髪を切るのだ。美容室に行つて。何気ない感じでお洒落しながら職場に通っている。さすがに陸もあたしが髪を切ったときは分かつてくれたようだ。気付かないわけじゃない。彼もそうだったことには敏感なのだし、営業マンである以上、髪形などは清潔にしていた。いつもヘアワックスを付けて立て、整髪してから会社に行っていたようだし……。

互いに満たし合いながら二〇一一年の秋を過ごす。まだ冬に入るまでに時間がある。上下ともきちんとした格好をして、出勤するのに変わりはない。また寒い季節が訪れるのは分かっていたのだから……。もちろんメールは欠かさなかった。紛れもなく愛情の印として。

(了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7599x/>

---

メール

2011年10月20日17時11分発行